19世紀イギリスにおける大衆読者層の形成
—読書施設の問題を中心に—

芝　田　正　夫

読者層とは「新聞，雑誌，書籍など印刷メディア内容に接触する受け手の階層」と定義され，更に「社会階層は読者層の母胎であり，政治・経済・社会の変動は社会階層を媒介にして読者層を規定する」と考えられている[1]。本稿は以上のような観点から，対象を19世紀イギリスにおける読者層形成に絞り，当時のいかなる政治・経済・社会の変動がどのような新しい読者層を出現させたかを明らかにする研究の一環をなすものである。後述するように読者層形成を規定する要因は多様であり，論者によって諸要因の中での重点の置きかたも大いに異なっているが，この小論ではまず19世紀イギリスにおいて，当時の読者層に具体的な形で読書の機会を提供した各種の読書施設——図書館，種々の施設の読書室など——の検討を行ない，読者層形成史研究の第一歩としたい。

ところで，読者層形成の歴史的研究においては，イギリスに限らないが，その実態を示す第一次史料に乏しく，関連する統計数字としてもリテラシー（読み書き能力）や初等教育における就学率などしか参考にならず，これらのデータも単純に読書層の規模の拡大と相関関係にはないとする見解が有力であるが[2]，本論では1849年に召集されたイギリス議会における公共図書館特別委員会（Select committee on public libraries）の報告書および同委員会に召換された32名の証人の証言録を第一次史料として検討することにより，当時の読書施設の実態と，各々の施設が読者層形成に果たした役割を解明したい[3]。

地域としてイギリス，時代として19世期——特に初期から中期——に注目するのは，当時のイギリスが前世紀後半からの産業革命の進行の中で，「すでにでき上がった伝統的体制と，工業化が生み出す革新的諸力（ブルジョアジーと労

働者階級）とによる弁証法的発展の過程にあり」[4]，新興ブルジョアジーおよび大量に生み出された都市の労働者階級が，それぞれの新しい独自の文化を作りつつあった時期にあたり，アルティック（Altick, Richard D.）の詳述するように，都市部の労働者階級を中核とする大衆読者層（mass reading public）が成立しつつあった時期だからである。

アルティックによると「19世紀中にイギリスにおける読者数と出版物の数は驚異的な増加を示したことは自明の事実であるが，一般にこの現象は当然のこととして考えられており，なぜ（the whys）いかにして（the hows）読者が増加したかは充分に研究されていない」[5]。彼はこうした問題意識から，当時の読者層形成を分析し，**The English Common Reader** という詳細な研究を残しているが，彼のいう〝the whys〟を明らかにすることが，読者層形成の要因分析にあたると考えられる。こうした観点から，本稿では大衆読者層に対象を絞り，労働者階級を中心にした新しい読者層形成に大きな役割を果たした読書施設の性格の解明にあたりたい。

2

大衆読者層形成を規定する要因にはどのようなものが考えられるであろうか。山本武利によると，社会階層構造の特徴が読者層構造を規定し，階層の成員のイデオロギー，社会意識が読者層のメディア内容にたいする意識に投影されるとし，さらに教育制度の普及によるリテラシーの向上と読書習慣の形成，新聞や雑誌などを購買できる経済的・時間的余裕の発生，送り手側からの安価・大量の印刷物の供給などを読者層形成の要因とし，特にリテラシーの向上と諸階層の社会意識の重要性を指摘している[6]。

前述のアルティックの労作はその副題 **a social history of the mass reading public** 1800－1900に示されるように，19世紀イギリスにおける大衆読者層の成立史研究を目ざした著作であるが，同書にとりあげられている諸項目に，彼の考えている読者層を規定する要因が明確にあらわれている。先の山

本氏の分析と重ね合わすと次のように整理できよう。英文がアルティックのとりあげているテーマである。

(1)社会階層およびその成員のイデオロギー，社会意識———the social background, religion, the utilitarian spirit

(2)教育，リテラシー———elementary education and literacy, secondary education

(3)出版物の供給———the book trade, periodicals and newspapers

(4)読書施設———the mechanics' institutes, public libraries

以上のように，アルティックの分析視角は，ほぼ山本氏の提示した形成要因と重なりうるものであるが，ここで両者の視点を参考にして，大衆読者層の形成要因を整理しておきたい。

a．一般大衆が一定の初等教育，成人教育を受ける機会を得て，その結果として不充分ながらも一定のリテラシーを持つ状態になること

b．社会意識として読書の効用が大衆の間に広範に認知されている情況

c．読書の対象である，大量かつ安価な出版物（図書，雑誌，新聞）の存在

d．読書に充てうる経済的，時間的余裕

e．大量，安価な出版物を大衆が容易に手に入れる手段の存在——出版流通および図書館を始めとする読書施設の問題

f．大衆の読書要求に適合した内容の出版物の供給

もちろん，これらの諸要因以外にも様々な要素が大衆読者層形成に何らかの役割を果たしていることは容易に想像できるが，まずこうした先行研究に既出の諸要因をより詳細に分析することにより，読者層形成史研究の枠組みを少しでも明確にしていくことが必要であろう。

3

以上の視点から，総合的な読者層形成分析の一環として，以下，当時の大衆読者施設の検討を進めていきたい。19 世紀前半から中期にかけてイギリスに存

在した読書施設については既に様々な文献に紹介されている。

まず，当時の著名な読書施設として大英博物館図書室がある。1759年に創立された大英博物館は，19世紀中期にはイタリアからの亡命者パニッツィ（Panizzi, Antonio 1797－1879）が刊本部部長（1837年就任），館長（1856年就任）としてその充実強化に努めた時期であり，蔵書冊数も1827年の15万冊から1856年には52万冊に増加し，また目録の整備などの改善事業も本格的に始められていた[7]。閲覧室についても1855年にその規模と形態で後世に至るまで著名な円型大閲覧室と書庫が完成し，1857年に利用者に公開された。蔵書の館外貸出は行なわれていなかったが，閲覧室は差別なく一般民衆にも公開され，19世紀中期には若きマルクスが，後期にはギッシングなどが閲覧室を頻繁に利用したことが知られている[8]。しかしその利用は19世紀後期には100万冊に達した古今の典籍を使っての研究のための読書であり，利用者も学者や文人がほとんどであった。マルクスやギッシングは当時は貧乏書生であったが，当時の大英博物館が労働者階級を中核とした大衆読者層形成に何らかの役割を果たしたとは，その蔵書構成や館設立の目的からいっても，極めて限定的なものとしか考えられない。

では当時の一般大衆の読書施設としてどの様なものが存在していたのであろうか。マルクスと同時期にイギリスに滞在していたエンゲルスはその著『イギリスにおける労働者階級の状態』の中で次のように記している。

> しきりに合同と分裂をくりかえしているこれらのさまざまな労働者の分派――労働組合員や，チャーチストや，社会主義者たち――は，精神的教養を高めるために，独力で学校や読書室をたくさんつくった。（中略）読書室においてある新聞や書物は，その全部か，あるいはそのほとんどがプロレタリア的なものである。それらの施設は，ブルジョアジーにとってはきわめて危険である。ブルジョアジーは多数のこれと似たような施設である「職工養成所（Mechanics' Institutions）」を，プロレタリアの影響からひきはなして，この学校をブルジョアジーの利益になるような学問を労働者のあいだにひろめ

るための機関につくりかえることに成功した。(傍点・引用者)[9]

同書の出版は1845年であり，エンゲルスが1842年から2年間滞在したマンチェスターにおける都市労働者の観察にもとずいて書かれている。ここでの彼の関心は労働運動のなかでの自己教育活動といった問題に向けられており，特に労働者の読書施設そのものは深く論じられていないが，ここで述べられている〝プロレタリア的な読書施設〞と〝ブルジョアジーによるプロレタリアのための読書施設〞が競合し併存していた情況はまず注目される。「職工学校」は後述するように，19世紀初頭から中期にかけて，イギリス全土に普及した労働者を主たる対象とする夜学校であり，必ずといってよいほど，一定規模の読書室を付置し，利用者に公開していた。

エンゲルスの観察した時代よりやや先行するが，ウイッグ党左派の政治家として1832年の選挙法改正に中心的な役割を果たしたブルーム（Brougham, Henry 1778－1868）は，1825年に発表した論文「人々の教育についての実験的観察」[10]において読書施設の効用について述べている。すなわち，貧しい人々に知識をもたらす最善の方法は廉価な著作の出版の促進であると説き，続けて次善の方策として労働者が安価な費用で利用しうる図書館ないしは読書施設の重要性を強調して，次のように述べている。

> 廉価な著作の出版には，貧民の収入の範囲内で知識をもたらすもっとも有効な方法なのであるが，われわれが注目に値する別の方法がある。それ（図書館や読書施設の設立――引用者）によっても同じように援助がなされうるし，貧民の資金は節約されうるのである。ある事情では，貸出し図書館が役にたつだろう。しかし一般的にいって，その図書館は，毎日あるいは一日おきに，一，二時間しか読書についやす時間をもたない人々には，ほとんど適しない。図書クラブ（book club)，あるいは読書協会（book society）－の方が，はるかにもっと労働している諸階級には適している[11]。

更にブルームは，民衆に読書を通じて有用な知識を広める手段として，既存の読書施設である職工学校(彼はこの種の学校の有力な推進者であった)，教区

図書館，農民図書館，巡回図書館などの役割に言及し，特に職工学校については，学校での正規の講義が充分に準備できない場合は，「図書館からはじめるのが賢明だろう。その図書館に，あとから講義を加えればよいのである」と説き[12)]，民衆教育施設における読書施設の価値と影響力を重視している。

以上の僅かな引用からも，イギリスにおいて19世紀前期から中期にかけて，民衆教育の必要性が強調されるなかで，知識を広める有力な手段として民衆への読書の普及が重要視され，更にエンゲルスの観察に見られるように，実際に労働者階級を主たる対象とした様々な図書館や読書施設が存在していたことは明らかであろう。次にそうした様々な読書施設として具体的にいかなるものが存在したかを，いくつかの先行研究を参考にしながら，その概要を探っていきたい。

4

ウィリアムズ（Williams, Raymond）はその著 **The Long Revolution** の中の一章〝the growth of the reading public〞において，イギリスにおける大衆読書層形成史を展開しているが，彼の論中においてもいくつかの読書施設が言及されている[13)]。まず貸出し図書館（circulating library）について，18世紀後期から19世紀前半にかけて出版点数の増加，特にフィクションの増加を支えたのは，商業的な貸本屋ともいえる貸出し図書館の成功であると評価している。出版一点あたりの平均発行部数は，serious の作品については750冊，貸出し図書館用の小説類については1250冊と報告し，貸出し図書館が小説類の読者層拡大に果した一定の役割について述べている。この他，18世紀においては，書物の価格が一般に高く，「本の購入は社会的に限定されており，18世紀の民衆にとっては，本の共同購入（corporate buying）という手段に，かなりの範囲まで頼っていた」[14)]と述べ，その一例として文学哲学協会（literary and philosophical society）に付属していた図書室，会員制のプロプライアトリー・ライブラリー（proprietary library）やブック・クラブ，それに前述の貸出し図書館

をあげている。更に安価な新聞や雑誌はコーヒー・ハウスや各種のクラブで広く読まれており，19世紀中期になると，書物の価格も比較的安価になったが，以上述べた会員制の種々の読書施設も存続し，中流階級および労働者階級の利用する施設に拡大していったと述べている。

アルティックが言及している読書施設はより多様でかつ詳細なものである[15]。貸出し図書館やプロプライアトリー・ライブラリーについてはそれぞれかなりくわしい記述があり，その他，コーヒー・ハウス，学校付属の図書室，教区図書館，公共図書館，などをとりあげ，特に職工学校については〝the mechanics' institutes and after〟という一章を設け，その果たした役割を詳細に分析している。

以上のように，ウィリアムズとアルティックの著作からのみでも，当時の多種多様な読書施設の存在が推測されるが，以下，ケリー（Kelley, Thomas）の説明によってこうした種々の読書施設の分類を考えてみたい[16]。ケリーは19世紀前半の図書館を始めとする読書施設について「多様な図書館施設を簡単に整理することは容易ではない」としながらも，次のような分類を試みている。

まず前世紀より継続して存在していた読書施設をも含めて，その起源，形態によって三区分をしている[17]。

(1)施設付属の読書施設（institutional library）
(2)寄贈によって設立された読書施設（endowed library）
(3)会員制の読書施設（subscription library）

こうした三種の読書施設のうち，大衆読者層と関連をもつ施設にはいかなるものがあったのか。まずその宗教的色彩の強さから利用が聖職者などに限定され，19世紀には衰退しつつあった(2)endowed libraryは一般大衆とは無縁のものであった。次に(1)institutional libraryについては，従来から存在した教会や日曜学校など宗教色の強い施設付属の図書館があり，それらは蔵書内容も宗教書が中心であったが，19世紀には世俗的な諸団体付属の読書施設が増加しつつあった。その種類は様々であり，たとえばハンプデン・クラブ（Hampden club），

協同組合（co－operative society），オーエン協会（Owenite society），チャーチスト・クラブ（chartist club），相互改良協会（mutual improvement society）など，宗教色を持たない当時の広い意味での成人教育団体が読書施設をもち，活動を展開していた。そうした諸団体の中で，とくに職工学校付属の図書室が質量共に最もすぐれていたとケリーは評価している。彼の説明によると，職工学校は1820年代初頭から設立され始め，1850年代には全国の工業地帯に普及し，19世紀中期には700にのぼる職工学校がイングランド，スコットランド，ウェールズに存在していた。名称は mechanics' institute と呼ばれる場合が一般的であったが，他の名称（たとえばliterary and scientific institute など）のものも存在した。

最後に(3)subscription libraryであるが，ケリーはこの種の会員制の読書施設を次のように細分して，それぞれの特徴を解説している[18]。

a．私的会員制図書館（private subscription library）

(1)プロプライエトリー・ライブラリー……会費（subscription）と共に図書館の所有者になるために株（share）を購入しなければならない。

(2)ノン・プロプライエトリー・ライブラリー……株保有の必要はなく，年会費のみで利用可能なもの。

b．ブック・クラブ

……上記のノン・プロプライエトリー・ライブラリーと基本的には同じだが，固定的な図書館もしくは図書室が維持されているのではなく，クラブが開設される時のみ，図書が配列される。

c．貸出し図書館または貸本屋（circulating library）……利益を目的とした商業主義的な会員制図書館，貸本屋と呼んだ方がよい。

18世紀には，以上のような多種類の会員制の読書施設は，主に上・中流階級のための読書組織であったが，19世紀においては，多くは中流階級――牧師，ジェントリー，学校長，医者，弁護士，商人，工場主など――を主な会員とするものが主流となり，さらに中流階級の援助を得て，労働者階級を主な利用者

とする会員制図書館が増加しつつあった。

以上,ケリーの所説を中心に19世紀前期から中期にかけての読書施設を検討したが，ケリーの場合，関心領域が図書館という形態に限定されており，コーヒー・ハウスなどより庶民的な施設については充分に触れられていない。ともあれ,これらの先行研究においては各々の読書施設について精粗の差はあるが,様々な記述がなされており，また読者層研究，図書館史研究以外の分野での研究も残されている[19]。こうした先行研究を踏まえて各読書施設の特徴や利用者などを個別に探る作業が次に必要となろうが,ここではまず19世紀中期における読書施設の多様な存在の実態を第一次史料で検討するために，前述の公共図書館特別委員会報告書の分析に移りたい。

5

近代的な意味での公共図書館（public library）は無料公開，一般民衆への公開，公費による運営を原則とし，具体的には以上の内容をもりこんだ図書館法の成立をもって制度的な保障を獲得していった。イギリスにおいては1850年に最初の公共図書館法が採択されている。同法成立に先立って1849年に下院に召集された公共図書館特別委員会において，当時の図書館および各種の読書施設の情況，更には読書や読者層の実態が論議され，同年中に委員会の報告書が提出され，当時の読書施設の貧弱さを強く指摘し，公共図書館の制度的確立を提言した。同報告書は〝1849 Report〞とも呼ばれているが，本稿では特別委員会の議長を務めた下院議員エワート（Ewart, William 1798－1869）の名前をとりエワート報告と呼ぶ。

さて，エワート報告は当時活動していた図書館，読書施設，成人教育団体(図書室をもつもの)などの関係者計32名を証人として召換し，読書と読者の実情把握に努めている。ここでは，これらの証人の証言をもとに1849年当時の読書施設の実態を明らかにしていきたい。最初に報告中に見られる読書情況全体の把握をみてみよう。

まず報告ではイギリス国内には新刊書一部の納入を受ける権利をもつ図書館（大英博物館など5館）を始めとして，大学図書館や大聖堂に付属したカセドラル・ライブラリー，教区図書館（parocial library）など既存の図書館が，いずれも公衆の充分利用しうるものではないとの結論に達している。

こうした情況の中で，民衆の間で独自に読書施設に類する施設を設立しようとする動きがあり，その代表的な例として職工学校付属の図書館および，コーヒー・ハウスに置かれた蔵書を挙げている。以上の点についてエワート報告では次のように述べている[20)]。

> 大英帝国にある公共図書館数が極めて貧弱であることに失望はするが[21)]，本委員会は，国民の間に読書施設の価値を認め，読書を好む傾向が増大していることを，各証人の証言で確認でき満足している。(中略)わが国民がこれらの読書施設を必要としている証拠として，自力によってこうした施設を設立しようとする彼らの努力があげられる。それは職工学校付属の図書館数を見れば明らかである。禁酒している労働者にとっての有益な場所として度々利用されているロンドンのコーヒー•ハウス（現在約2000軒）でさえ，利用者のために蔵書を備えることが必要だといわれている。労働者が自力で学問をしようとするこれらの試みは，公共図書館の設立によって学問を奨励する一つの理由となろう。

労働者が独力で，(もしくは中流階級の援助のもとで)つくりつつあった読書施設の実践を委員会は評価し，そうした活動を公的に保障するために公費による公共図書館の必要性を強く提言している。

いっぽう前述の委員会に召換された32名の証人が証言中で触れているイギリス国内の読書施設の主なものは次のような施設である。エワート報告には詳細な索引が付けられているので，それにもとずいてアルファベット順に施設名を列挙する。

British Museum,	cathedral library
circulating library,	clerical library

coffee house, college library
diocesan library, farmers' library
itinerating library, mechanics' institution
ministerial library, parochial library
presbyterial library, private library
provincial library, public house
public library, ragged school library
regimental library, roman catholic chapel
subscription library, town library
university library, village library
working men's association

以上のごとく，大英博物館からコーヒー・ハウスに至るまで実に多種多様な図書館・読書施設が証言中に取りあげられている。中には宗教色の強い図書館（cathedral library, clerical library など）や大学図書館も多く含まれているので，先に整理したアルティックやケリーを参考にして，これらの中で特に大衆読者層形成に何らかの役割を果たしたと考えうる図書館・読書施設についてエワート報告中の証言を引用しつつ，それぞれの性格を明らかにしていきたい。

6

1. circulating library……貸出し図書館もしくは貸本屋と訳しうるものであるが，次のような証言がなされている（各証言の番号は証言録中の通し番号である）[22]。

749. アバディーンの町にcirculating library は存在するか———存在する。

750. circulating library は中流および下層階級によって頻繁に利用されているか———両方の階級によく利用されている。

751. 蔵書の特徴は———小説が多く，その他，短命物 (ephemera) がある。

以上の簡単な証言では詳細は不明であるが，ともかく中・下層階級に主に小説類を貸出す読書施設として，18世紀から引き続き活動を続けていたと考えられる。

2. coffee house………コーヒー•ハウスについてはチャーチスト運動家としても著名なラベット（Lovett, William 1800−1877）が次のような証言を残している。

2771. ロンドンにコーヒー•ハウスは現在約2000軒あるのか———先に述べた通り2000軒はある。

2772. そうしたコーヒー•ハウスは労働者の中のまじめな（sober）層がよく利用する施設なのか———その通りである。

2773. 実際のところ，コーヒー・ハウスには飲酒にふける手段は存在しないのか———全くない。コーヒー・ハウスに行けば，多くの労働者が読書をしていることを観察できよう。2000軒のコーヒー•ハウスのうち500軒は付属の図書室をもっており，蔵書冊数2000冊というところもある。

2779. コーヒー・ハウスの経営者の中には雑誌，新聞，図書の購入費に年に何百ポンドも使っている者もいるか———その通りである。ある経営者は，週平均5ポンドを新聞・雑誌代に費やすと言っていた。

2780. コーヒー•ハウスの中には一日に1500人もの客が出入りするところもあるのか———正確な数字は不明だが，どのコーヒー・ハウスも労働者でいっぱいの状態である。

これまたくわしい利用状況はもうひとつ明解ではないが，ロンドンにおいて，コーヒーや紅茶を飲みながら，図書，雑誌，新聞を読める施設（というよりは店）があり，蔵書も2000冊というのだから，かなり立派な読書施設だったようである。

3. mechanics' institution

職工学校の図書室については5人の証人がかなり詳細な証言をしている。そのいくつかを抜きだしてみよう（通し番号の次は証人名）[23]。

1959 (Smiles) ヨークシャー・ユニオンに属する職工学校の蔵書数は―――全部で6万冊あり，一校平均900冊である。ユニオンには現在79校が属しており，更に10－12校が加盟を予定している。学校の会員数は合計で約16,000人である。

1960 (Smiles)

図書室の蔵書に特徴はあるか―――歴史，政治，経済などあらゆる種類の図書があるが，大部分はフィクションである。

1961 (Smiles)

特に利用者に読まれているのはどんな図書か―――フィクションである。しかしより高い内容の図書に対する要求も増加しつつある。

1968 (Smiles) 職工学校は実際は〝職工の学校〟ではなく，上級の職工および中流の下層階級のための学校と考えてよいのか。―――確かにそうである。

労働者のためのみの施設とは言い切れないようであるが，スマイルズの以上の証言から，特にフィクションを中心とする軽読書を提供する施設として職工学校は19世紀前半から中期にかけて，イギリスの中下層階級の読書生活に少なからぬ役割を果たしたと考えていいだろう。次に別の証人の職工学校に関する証言を検討してみよう。

2422 (Langley) 職工学校は何校あるか―――考えられているよりはるかに多い。少なくとも現在活動中のものは，イングランドとウェールズで400校にはなろう。

2424 (Langley) 職工学校において図書室は絶対必要 (essential) なものか―――もし図書室がなければ，職工学校は存在しないだろう。職工学校は図書室が提供する魅力によって存続している。もちろん講演 (lecture)，学級 (class)，討論サークル (discussion society) などによる労働者教育の手段もあるが。

2425 (Langley) 図書室の蔵書について何か―――よく利用されている図書館ではフィクションが中心である。小さな職工学校では小説への要求が主であ

る。小説の排除を決めた学校もあり，Garforth 職工学校などはそのために図書の貸出は他の学校に比べて非常に少ない。

これらの証言にも，職工学校が小説類を提供する施設として機能していたことは明らかである。

4．subscription library

前述のケリーの解説によると，多種多様な形態で存在した会員制図書館である subscription library については，エワート報告では僅かではあるが次のような証言が記録されている。

1278 (Dawson) バーミンガムの図書館を労働者は利用できるのか———できない。利用者は図書館に20シリングから30シリングの会費 (subscription) を払わなければならないからである。[24)]

1279 (Dawson) マンチェスターには同種類の会員制図書館はあるのか———マンチェスターには良質の会員制図書館がある。しかし会費が集まらない場合は使いものにならない。

会費が高額であったため，会員制図書館は労働者階級が自由に使いうる読書施設とはいえないようである。ただケリーが指摘している労働者を主な利用者とする会員制図書館についてはエワート報告では言及されていない。

5．working men's association

この施設については前記のラベットが簡単な証言をしているだけで，詳細は不明だが，あるいは労働者向けの会員制図書館を意図したものとも考えられる。

2800. ロンドンにおいて最も貧しい階級に対して図書の貸出をしている図書館はあるのか———Working Men's Association と呼ばれる団体などで小さな図書館を設立しようとする試みが数年前になされた。

以上のように，エワート報告のみでは各々の読者施設が読者層形成に果たした役割は充分には明らかにはならず，更にアルティックを始めとする先行研究や他の第一次史料とのつき合わせにより，より詳細な読書施設の分析が必要なのはいうまでもないが，本稿の目的としては，エワート報告の中から，1849年

当時実際に活動をしていた読書施設を選び出し，いわば 19 世紀中期イギリスにおける，大衆読者層形成と関連のある読書施設の〝鳥瞰図〞を提示する作業と考えたい。

7

イギリスにおける大衆読者層形成をアルティックの指摘のように 19 世紀における現象として捉え，具体的な形で大衆読者に読書の機会を提供した各種読者施設の概略を検討してきたが，最後にまとめとして次の三点を指摘しておきたい。

まず，19 世紀の多種多様な読書施設のなかで，労働者階級が実際に利用し，大衆読者層形成に貢献をしたのは，大英博物館など既存と大図書館や宗教色の強い図書館ではなく，19 世紀初期から都市部を中心に急激に普及した職工学校図書室や，エワート報告ではロンドンの例のみが明らかなコーヒー・ハウスなど新興の読書施設であったことである。職工学校は従来，社会教育施設として紹介され，研究も進められているが，[25]，その図書室の機能に着目し，利用者や蔵書内容の分析を通じて大衆読者層形成に果たした役割を実証的に探っていく作業が必要であろう。コーヒー・ハウスについては 17 世紀に起源をもち 18 世紀に栄えた中流階級のサロンとしての紹介はなされているが[26]，19 世紀における労働者のクラブとしてのコーヒー・ハウスの役割の解明も今後の課題である。

次に，18 世紀から引き続き存在し活動していた種々の会員制図書館は，多くは比較的高額な会費を払う余裕のある上，中流階級の利用が中心であり，大衆読者層形成とはやや離れた場所で活動していたと考えられる。しかし会員制図書館についても，その会員数や会費の額，蔵書構成など今後の検討課題を多く残している。

最後に，本稿ではエワート報告中に見られた若干の読者施設の概略紹介に留まり，読書施設の全体像および大衆読者層形成に果たした役割は充分に提示できなかったが，読者層研究の一環としての読者施設研究は従来ほとんど取り組

まれていない課題だけに，当面は不充分ながらもまず第一次史料の紹介と分析から始めなければならないと考える。こうした視角から，先に述べた教育やリテラシーを始めとする大衆読者層形成の諸要因をできる限り原資料にもとずいて整理，検討していくことを今後の課題としたい。

註)

1）南博監修　マスコミュニケーション事典　昭46年　学芸書林p. 551（「読者層」の項目の執筆は山本武利）

2）山本武利「新聞読者層の歴史的研究――英米における研究の視角と史料」p. 319, 333（東京大学新聞研究所編　コミュニケーション　行動と様式　昭49年　東京大学出版会　所収）

3）同委員会の報告書の正式な名称は*Report from the select committee on public libraries: together with the proceedings of the committee, minutes of evidence, and appendix* (Irish University Press Series of British Parliamentary Papers の一巻として1968年に複刻版が出版されている)

4）青山，今井，越智，松浦編　イギリス史研究入門　昭48年　山川出版社　p. 198（19世紀イギリスについては村岡健次執筆）

5） Richard D. Altrck, *The English Common Reader, A Social History of the Mass Reading Public 1800−1900;* Chicago: Chiago University Press, (1957), p. 1.

6）南博監修　前掲書　p. 511

7）藤野幸雄　大英博物館　昭50年　岩波書店（岩波新書）pp. 64−65

8）『カール・マルクス』（E・H・カー）によると「彼（マルクス）は1851年の夏に，だいたい9時から7時まで大英博物館に坐って経済学のごたごたした支脈に没入していた」。（E・H・カー著　石上訳　カール・マルクス　昭31年　未来社 p. 126）
ギッシングは19世紀後期の大英博物館の印象を『当世三文文士街』(1891）に述べている。マルクス，ギッシングが大英博物館を利用していた点については次の文献を参照。
小池滋　ロンドン　ほんの百年前の物語　昭53年　中央公論社（中公新書）pp. 22−23, pp. 30−31

9）フリードリッヒ・エンゲルス著　全集刊行委員会訳　イギリスにおける労働者階級の状態 (2)　昭46年　大月書店（国民文庫）　同書ではMechanics' Institution を職工養成所と訳出している。他に機械工養成所などとも訳されている場合もあるが，以下本稿では職工学校と訳語を統一した。

10）Henry Brougham, *Practical Observations upon the Education of the People, adressed to the Working Classes and their Employers*, (1825)
（浜村正夫，安川悦子訳　イギリス民衆教育論　昭45年　明治図書　所収）

11）前掲書　pp. 123－4　文中の貸出し図書館は恐らく circulating library の訳であり，後述するように「貸本屋」とも訳しうる会員制の読書施設である。

12）前掲書　p. 136

13）Raymond Williams, *The Long Revolution* ;London : Penguin Books, (1961) ,

14）*ibid*. p. 184

15）Altick, *op. cit.*

16）Thomas Kelly, *Public Libraries in Great Britain before 1850*; London : The Library Association, (1966), pp.33－38

17）*ibid.* p. 33

18）*ibid.* p. 26

19）たとえば清水一嘉氏の次の研究がある。

① 「18 世紀英国における読者層の成立と貸本屋」（愛知大学英米文学研究会『Focus』　第 4 号　昭 43 年）

② 「18 世紀英国における「ブック・クラブ」と地方における読者の問題」（愛知大学文学会『文学論叢』　第 43 集　昭 45 年）

③ 「18 世紀英国における‘ Proprietary Library’ その他」（愛知大学文学会『文学論叢第 44 集　昭 45 年）

清水氏の研究はいずれも 18 世紀イギリスを対象としているが，“proprietary library” など 19 世紀にも存続していた読書施設の性格や読者を論じている。

20）*Ewart Report*, p.vii.

21）ここで言われている〝公共図書館〟は前述の公共図書館法にもとずく図書館という限定的な意味ではなく，既存の図書館で少しでも一般民衆に公開されているものを意味している。

22）エワート報告に付けられている証言録は特別委員会の委員（15 名）と 32 名の証人との一問一答形式で記録されている。証言録は 254 ページ，質問数は 3000 項目を越している。

23）以下の証人スマイルズは *Selp Help* ＜自助論＞の著者として著名な Samuel Smiles (1812－1904）である。

24）ここに述べられている金額はおそらく年会費であるが，コールによると 19 世紀中期における労働者の生計費は一ヶ月 10 シリング（不熟練工）から 30 シリング（熟練工）であり，かなりの高額な会費だったと考えられる。（G. D. H. コール著　林，河上，嘉治訳　イギリス労働運動史 1　昭 27 年　岩波書店　p. *(iv) (v)*）

25）社会教育史研究の一環としての職工学校の紹介としては，たとえば次の著作がある。
小堀勉編　欧米教育発達史　昭 53 年　亜紀書房　pp. 185－188

26）角山榮　産業革命と民衆　昭 50 年　河出書房新社　pp. 94－96